

川崎市教育委員会賞

動物に優しい川崎の町

南河原小学校 6年生 福田 茜

「シャクシャク、シャキシヤキ」

静かな飼育小屋にこちよいそしゃく音が聞こえてくる。私が通っている学校で飼っているモルモットだ。私は今飼育委員会に入っている。飼育委員会ではモルモットのお世話をする他に、学校 みんなにモルモットの可愛さや、命の大切さ、尊さを教える仕事がある。そのために行っているのがふれあい交流会だ。ふれあい交流会とは、学年ごとにモルモットにふれあえる機会をつくり、命の大切さについて知ってもらう会だ。

なぜ、私はこんなにもみんなに命の大切さを知ってもらいたいかというと、ある出来事がきっかけだった。

私が生まれて一年もたっていない三月十一日、体を大きくゆさぶられるような大きな、大きな地震が起きた。それが東日本大震災だ。私はまだ小さかったので覚えていないが、最近になってからその大地震の大変さを知った。

大地震や災害が起きたら人間、すなわち私達が最優先になる。

「それは、あたりまえではないか。」と、思うだろう。しかし、人間達が優先になったとき、ペットなどの動物たちはどうなるのだろうか。私は、人間優先について反対しているわけではない。とり残されたペットたちはどうなるのかということだ。このことが気になったとき、震災後に実際に動物を保護したという方の本を読んだ。すると、ものすごく悲惨な現場だったことが分かった。犬小屋につながれたままの犬がワンワンと吠え立てている。えさ皿はさびついた底が見えてしまっている。愛犬や愛猫を連れてひなんしたいが、ひなん所が受け入れてくれず、しかたなく、「元気に暮らしてね。」と、はなされた飼い犬が近所の犬のえさを食べてしまったらしい。そんな犬がたくさんいて、力尽きてしまったり、保健所に捕獲されて殺処分されてしまったりする犬もいたとその本に書いてあった。

この事態を防ぐためには同行ひなんが必要だと私は思う。同行ひなんとは、人間だけがひなんするのではなく、ペットも一緒にひなんするということだ。しかし、現状はペットと一緒にひなんをしてもひなん所が受け入れてくれず、先ほどの状態になってしまうのだ。同行ひなんは、ペットと一緒にひなんするだけではない。自分達のひなんグッズだけでなく、そのペットのフードやペットシートなども用意しておかなくてはならない。もしかしたらひなん所がペットを受け入れてくれても、外でペットをつないだままにしないでなくてはならなかったり、中には犬、猫などのアレルギーを持っている人もいるかもしれない。そんな不安をかかえて困ってしまう人もいるだろう。

そんな不安を解消するための策として私は人だけのひなん所と、同行ひなんの人

も入れるひなん所をつくれれば良いと思う。そうすれば、アレルギー持ちの人は人だけのひなん所に行くことでおたがいの気づかいも無くなる。同行ひなんの人のひなん所は、ペットがいるということが分かるために安心してひなん出来るのだ。

東日本大震災の資料や映像を見て命の大切さを知った。同じ命なのにあつかいが違うのはおかしいことだと私は思う。私は飼育委員会でふれあいなどの活動を通して命の大切さを知ってもらおうとしている。未来の川崎はみんなが動物に対して優しい町になっていてほしいと思う。